

2026年4月3日

入学式 式辞

院長・学長 中野敬一

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。
また、ご家族ならびにご関係の皆様におかれましても、本日は誠におめでとうございます。
皆様が今日という日を迎えるまでに注がれた、多くの愛情と支えに、心より敬意を表します。

満開に近い桜が咲き誇るこの季節に、皆さんを神戸女学院大学のキャンパスにお迎えできることを、私たち教職員一同、深い喜びとともに受け止めています。春の光に包まれたこの場所で、皆さんが新たな一歩を踏み出される姿を目にすることは、私たちにとっても大きな励ましであり、教育に携わる者としての使命を新たにする瞬間でもあります。

人生にはいくつかの節目がありますが、入学式はその中でも大きな意味を持つものです。これまでの歩みを大切にしながら、新たな決意を胸に未来へ踏み出す皆さんの姿に、私たちは大きな期待を向けています。今日という日は、皆さんの人生における新しい章の始まりであり、これから出会う学びや人々が、皆さんの未来を豊かに形づくっていくことでしょう。

神戸女学院は1875年、アメリカから来日した二人の女性宣教師、イライザ・タルカットとジュリア・ダッドレーによって創立されました。昨年創立150周年を迎え、本年度は151年目の歩みを進めています。150年という歳月は、決して短いものではありません。

その間には、社会の変化、価値観の変化、教育の在り方の変化など、さまざまな時代の波がありました。しかし本学は、その中にあっても創立者の精神を受け継ぎ、揺るぎない理念を守り続けてきました。

創立者のお二人は、自らが知った「福音」（「良い知らせ」という意味）を他者と分かち合いたい、という思いから宣教師となりました。その精神は、派遣元である「アメリカン・ボード」の合言葉でラテン語の *non sibi*（自分のためではなく）”に象徴されています。自分の利益や成功だけを求めるのではなく、隣人のために、自分にできることを行う。その姿勢は、150年前の創立の原点であり、今もなお本学の根幹を成す理念です。

お二人はその精神を胸に、日本で出会った女性たちのために学校を設立しました。当時の社会状況を考えれば、それは大変勇気のいる決断でした。しかし彼女たちは、教育が人の人生を変え、未来を拓く力を持つことを信じていました。そして、女性が主体的に生き、自らの可能性を見いだすことを強く願ったのです。

神戸女学院が掲げる学院標語「愛神愛隣」には、困難の中にある隣人に寄り添い、支えることのできる人を育てたいという願いが込められています。これは単なる理念ではなく、150年にわたり本学が実践してきた教育の精神そのものです。「困っている人がいたら手を差し伸べることができる人になってほしい」という創立者の願いは、今も変わらず私たちの胸に息づいています。

皆さんはこれから大学で学び、知識を深め、技術を磨き、自らの人生を豊かにしていくことでしょう。しかし、その学びを自分のためだけでなく、隣人の喜びや幸せのために用いることができれば、そこに学問の本当の価値が生まれます。「何のために学ぶのか」という問いの中に、「誰かを支えるため」という視点をぜひ加えてみてください。学びは、誰かの人生を照らす光にもなり得るのです。

本学のリベラルアーツ教育は、専門性を深めつつ、学びを他分野へと広げるものです。異なる領域に触れることで視野が広がり、世界はより鮮明に見えてきます。自分がこれまで気づけなかった興味や関心が芽生え、新たな可能性が開かれていくことでしょう。大学での学びは、皆さんの未来を形づくる大切な土台となります。

どうか大学生活では、さまざまなことに挑戦してください。人生の中でも最も自由に時間を使える貴重な時期です。新しい価値観に触れ、自分の感性を磨き、自らの世界を広げてください。挑戦には不安が伴うこともありますが、その一步を踏み出した先にこそ、成長があります。

焦る必要はありません。どうか自分のペースで歩んでください。本学の豊かな自然と美しいキャンパスで流れる時間を感じながら、自分自身と向き合い、心を開き、さまざまな呼びかけに耳を傾けてほしいと思います。私たち教職員は、皆さんの挑戦を全力で支えたいと願っています。本学での出会いが、皆さんにとって偶然ではなく、必然であったと感じていただけることが、私たちの何よりの喜びです。

そして、人との出会いだけでなく、言葉との出会いも大切にしてください。自分を支え、生きる力や希望を与えてくれる言葉に、いつか必ず出会えるはずです。その言葉は、困難な時に皆さんを励まし、迷った時に道を示し、未来へと歩む力を与えてくれるでしょう。言葉との出会いは、人生を豊かにする大切な宝物です。

お一人おひとりの大学生活が実り豊かなものとなりますよう、皆さんの前途に神の祝福をお祈りし、私からの言葉といたします。